

資料紹介 『遊京雑歌』

(時習館教授・高本紫溟らによる紀行)

柿 本 加 奈

解題

「遊京雑歌」は、江戸時代中期の熊本藩の儒者・高本紫溟と、門弟・長瀬真幸、同じく門弟の山口真積の三人による紀行である。

彼らについて説明をしておく、まず、紫溟は元文三年(一七三八)に生まれ、名を順、字を子友、慶蔵(後に敬蔵)と称した。号を紫溟。後の天明八年(一七八八)には、藩校・時習館の第三代教授となり、藩主・細川重賢の伝記『銀台遺事』の編纂を命じられるなど、優れた儒者として勤めた人であるが、一方で和学にも深く通じており、後代には「肥後国学の祖」と称されるように、儒者でありながら和学も疎かにしていなかったとして讃えられることが多い。弟子である長瀬真幸に国学者・本居宣長に師事することを勧め、彼の遊学に同行し宣長に見える、ということからも紫溟が和学を重視していたことが伝わるだろう。

真積については、現段階では判らない部分が多いのだが、後述の、上妻博之氏による論文「長瀬真幸伝」には、通称栄五郎、阿蘇郡尾ヶ石村の神職とある。真幸同様、紫溟の高弟であるとするが、この「遊京雑歌」でも、真積が阿蘇から出立していることを挙げておく。

最後に真幸についてであるが、明和二年（一七六五）に生まれ、通称を七郎平、田廬と号した。本居宣長の門人となり、肥後に鈴屋の国学を伝えたとき、自身も萬葉集の研究で一家を成すなどした人物である。一方で江戸派の国学者との交流も盛んであったらしく、国学者の交流を考える上でも興味深い人物である。

その彼が、前述したように寛政五年（一七九三）、紫溟の計らいで藩に遊学の願いを出し、本居宣長の門人となっており、その後の同八年にも再び宣長に学び、翌九年には紫溟と共に伊勢へ向かっているのであるが、今回紹介する「遊京雑歌」は正にこの、伊勢松坂に宣長を訪った際の紀行である。紫溟・真幸・真積の詠んだ歌が収められているだけでなく、その旅程も窺える珍しいものである。しかしこれまであまり知られることのない資料であったので、全文翻字を行うことにした。但し、今回この稿を成すに当たり、熊本県立図書館・上妻文庫に所蔵の上妻博之氏の写しによる写本（史料番号、上妻文庫65）を参照したが、雑誌「日本談義」昭和三十六年四月号から同年十一月号まで連載された「長瀬真幸伝」の第三回（六月号）には、「寛政九年菅相寺の歌会」、「紫溟、真幸の贈答歌」としてこの「遊京雑歌」が紹介され、上妻氏による一部翻字が掲載されていることも併せて附記しておく。

その記述と、『新訂肥後文献解題』（上妻博之著、舒文堂河島書店、昭和六十三年五月）によれば、「寛政八年高本紫溟が伊勢京坂地方遊歴の時、同伴した愛弟子長瀬真幸、山口真積三人三様に認めた紀行文である」、「紫溟、短歌五十七首長歌一首、真幸、短歌百二十八首、真積、短歌四十五首。」と解説してあるが、これは寛政九年の誤りであろう。また、歌数の内訳を述べると、真幸の短歌百二十八首とあるのは、真幸自身の短歌百八首、紫溟の短歌十七首（その内、真幸との

贈答歌十二首)、真幸が上の句を、紫溟が下の句を詠んだもの一首、伊勢に於ける宣長の二首、その他に本居大平の文を含む。真積の短歌四十五首は、真積自身のものが四十三首、経輔(宮川紘、阿蘇家配下の社家。寛政五年に宣長の門人となっている)のものが二首。

その内容を簡単に述べると、この旅の行程は以下のようなになる。寛政九年二月二十一日に伊勢へと旅立った(紫溟と真幸は熊本から、真積は阿蘇から出立)一行は、太宰府、宮崎宮、香椎宮と巡り本州に上陸、厳島、金刀比良、高砂の松、と名所を巡る。三月十七日には嵐山で花見、吉野を目指し、大和の山々を過ぎ、二十四日に吉野に宿る。周辺を巡って二十六日に吉野を発ち、二十七日には多武峰、二十八日は三輪山、初瀬と辿り、伊勢松坂に到着する。紫溟が「菅笠日記の道をとめて」と詞書に記したように、この行程は宣長の「菅笠日記」(宣長が明和九年に旅し、認めた日記。成立も同年か。刊行は寛政七年)と同じ行程を辿っている。紫溟たちは宣長とは逆の方向から京都方面から向かった為に、行程が逆になってはいるが、耳成山、畝傍山、天香山を巡り吉野へ、実城寺、竹林院、如意輪寺、後醍醐天皇陵、清明が滝、宮滝、多武峰から松坂へ、と「菅笠日記」に現れる場所を辿っている。

中には「本居」氏(宣長か)による歌の添削も見られる。紫溟の「是やその呼子鳥かも滝の上のみふねの山の明かたの声」という歌に、「これやそのといひて、かもといひては、やとかと重なり候也 本居」とあるのがそれである。

その他、この書の伝来についてであるが、写本の巻末にあるようにその出所は判然としていない。上妻氏がこの書を書写するに至った経緯は、大分の古書肆・三重野某による写本を更に清書したというものだが、その三重野氏も、寛政十一年冬にこれを写した橋比呂寸、また、彼にこの書を写してもらったという「源の奈」(難読箇所)についても詳細は判らないと記している。但し、上妻氏も巻末にて述べているように、この書が大分に伝わった経緯には山口真積が関わっているのではないかと思われる。それは旅の終盤、彼が「(寛政九年五月)十三日、備後別府にて和喜ぬしに初め逢て」と

詞書に記していることから推察される。この「和喜氏」というのは、紫溟と関わり深く、後に時習館にも勤めた脇蘭室のことであろう。脇蘭室は、明和元年（一七六四）に生まれ、文化十一年（一八一四）に五十一歳で没している。名を長之、字を子善、儀一郎と称し、蘭室、又は愚山と号す。豊後・日出藩の出身であり、熊本藩との関係の深さもさることながら、寛政十年（一七九八）に時習館訓導となった際には紫溟からの願いによりこの職を引き受けていることから、紫溟との個人的な関わりが窺える。

最後に、今回は資料の紹介のみであるが、紫溟の和学については別稿に述べる予定である。

〈凡例〉

通読の便を図るため、句読点、濁点、「」は私に補った。三人の冒頭の【】も同様である。また、難読箇所は□としている。

【紫溟】

筑前八幡宮にて

高木したがふ

此神のうちまつはせし唐国のみつきの舟は今も通へり

香椎宮にて

名にしおふ香椎の宮のあや杉はあやにたふとく神佐備にけり

おひの水にて

香椎潟いその岩根の底深く神のをさめし天のせし水

漢国をうちまつはせしかみつ代のそこひの水は今も清けり

沖津藻を籠にいられて香椎宮の大前にそなへたり。あやしとみれども、こと、ふべき客人も見えず、老たる女の物うりてありけるに、いかなる物にととへば、こはむかしよりのならはしにて、二月六日、十一月六日、し、のうら人鉾もてになひたてまつるなり、事のよしをばしらず、といふをき、（つゝ）き神馬藻の事を思ひ出ていにしへの神の馬草と島人の今にみつける沖津藻や是

二月廿八日、赤間関より船を出して

日和もよし追風もよし君がためこゝろみがてら舟出しつれば

夕つかた、波風あらかりければ神にいのることありて、物にかきつけて海にしづめける

沖津風あらくな吹そわたの原きみがみ舟を漕渡るほど

吾君のけふのためにと舟出せし心はしるや綿海の神

巖島のみやしろにまうで、よめる長歌

沖津島鶴のある島に宮柱ふとしきたて、玉垣のうちまでよするしら波のいやしきく、に遠近の舟も来かよひみつしほのいやまさりぬる里人もこへぞにぎはふ天さかるひなにはあれど大君の御幸かさねしみあらかに今もかわらずつく鈴のすゞうちふれるおをとめ子が袖ふく風もかくわしき花のみやこと常とだにいつきまつれるいちきしま姫

反歌

うらやすき国のかためとこゝにしも宮はしめけんいつき島ひめ

三月二日、きびの海をこぎわたる

海の面いさごに波だにた、ぬ日の舟は鏡のうちよりぞゆく

此わたりの鳥々、人おほくすめるを見て

よもの海は八十鳥落すたつ烟かすときはふみ代ぞしるしも

象頭山のみやしろにまうで、今は甘とせあまり五六とせにやなりなん。比御神にちかひ奉る事を物にかきつけて、

みやしろのほとりの池にしづめし事をおもひ出て

誓つるむかしのま、にゆくすへもなほみそなはせこんびらのかみ

契あれや千とせへだて、すめる身の三度のほれる島の神やま

かなたこなたのほこらを拝みめぐるとて

此宮はいかなる神としらねども玉垣みればぬかづかれけり

四日、夕がた風あれ波しきて、児島のわたりにふねをとめて夜の明をまつ

玉藻よしさぬきの国ゆ舟出してきびのわじまに浮寝すわれは

赤穂の城を見て

是やその名をし立つる武士のある木のつかの赤穂てふしろ

虫明のせとをこぎゆくほど、日暮ぬ

夕月夜おほつかなきをむし明のせとの松風名にたて、吹

室よりは陸をゆくとて山路にかゝるほど、雨ふりきぬ

ぬれつ、も山路はゆかむみふねこぐ沖津しほ風雨なさそひそ

鹿兒島の松を

春雨にぬれつ、来ずば鹿兒島の松のまされる色をみまじや

高砂にて

高砂の松は常磐の木の本にふた、び来ぬる身社老ぬれ

行々もなほかへり見て

高砂の松をこめたる夕霧にをののかねの声ぞもり来る

真幸はけふことかたの道を行て

みし人にいざこととはん高砂の松吹風はいかに有きや

といへるに返し

立よらで過行人を高砂の松とぞ風の音もきこえじ

風はいと寒き日、磯つたひ行にあわぢしま近く見ゆ

春寒み霧もやらぬ波の上のこるは雪の淡路島やま

又のどかなる日もありて

和田の原空もひとへに霞む日の雲井にかよふあまのつりぶね

すみよしといふ里にやどりけるに、海の面はるくみわたされていとおもしろき所なりければ

こ、も又春の海へのながめよりすみよしとしも名づけそめけむ

三月十九日、ふしみを出て巨椋の堤つたひゆく程、雨風いとけはしきに、今しもわが君の近江路にか、らせ給ふ蘭と

思ひやりて

おほくらの入江の波はさわぐなるうち出の浜も風やしくらん

いづみ川にて

なら坂は明日こそこへめいづみ川涙をひろみ日は暮にけり

なら坂にて、この手柏をたづぬるになかりければ

なら坂にこのてかしの見へざるはふたおもてなき世のしるし鴨

大和の国内を行めぐりて、三月廿日あまり、芳野山におもむく道すがらあふ人ごとに花はいかにとふに、過し夜の
あらしにちりはてぬとのみいふをきゝて

遅くとき花もあらんをよしの山なべて散ぬといかでいふらん

麓にいたりて見るにまことに散にければ

吹ば散花のならひを知らながら風におくれし身をぞうらむる

なほたづね行とて

ちり残る花もやあるとよしの山夕ある雲をはけつゝぞゆく

こよひは此山中にやどりて、つとめて（雲立本マ）〇き出で峯の方をながむれば雲立おほひ小雨落る

雲雲ははやもはれなん朝日影艶へる山の花も見るべし

此※□□き聞しらぬ鳥の鳴ければ

名のみまきく是やその呼子鳥かも滝の上のみふねの山の明がたの声

これやそのといひてかもといひてはやとかと重なり候也 本居

雨をやみければなほ奥ふかく分入に、はつかにちり残れる花もあれば

芳野山けふこん人のためとてや嵐に花を残しおきけむ

竹林院の庭の花ざかりなるに、ひきくさしおほひ垂枝のかたはらに、折とるべからずといふ札をたてたる所にて

なにしかも折て頭押ん立よれば老もかくる、花の下陰

おくのかたはなほさかりなるをたづね行て

あしかきの吉野の山の桜花まぢかきまでも雲かとぞ見る

一とせ花の歌とぞ、おもひやる心ばかりは春ごとに来て馴にけるみよしの、花とよみける事を思ひ出て

心あてに馴ぬとかねて思しは枝にもあらぬみよしの、花

松しげく立る所を分けゆく程、嵐いとはげし

よしの山花の蕾はしづかにて尾上にさわぐ松風の声

吉野川に花のちりうかびけるを

よしの川やなせにかゝる花の浪峯の嵐もえやはうらみん

かへるさに、きさの小川のほとりを行程、日暮、雨さへいたくふり来ていとたとくし

みよしの、花のしら雲分暮て暗にて迷象の山道

又の日（実数）城寺にまうで、

三世を経て大宮所来て見ればいはねこわしき真木し、たてり

後醍醐天皇の陵ををがみて

雲だにも八重に立なん玉垣を只の御はかと立人（云数）もなし

雨いたくふる日はね（多武峯殿）のみねにおもむくとて

ぬれつ、もゐりひの山をこえゆかんよしの、川の水まさぬ間に

さかしき山路を分のぼるに、雲霧いと深し

よひかはす声をしるべに友共の霧わけ侘るみねのほそ道

をのれはかごといふものにのりて行は

み山路の雲の中をやすらかにゆく日も君のめぐみをぞ思

このかごをになひてのぼるものも同じ人ならずや、おそれてもおそるべき事になん、たふの峯はたぐひなるたかくして、嵐たけしくなを冬のけしき也

なべて世は花散比の風さへて木のめはなどもなきみやまかな

うねび山、み、なし山を見わたして

あらそひし山はかすみてき、すのみつまとひかはすいなみ国原

三輪の里の宿をかるとて

まつ人もあらじ物ゆへ今宵はたひとりかもねん三輪の山本

古のけるみわの市人こと、はん昔にかへる道をうるやと

弥生廿八日、初瀬にて

阿海小舟まこと初瀬せの山ならば暮行春の湊ともかな

かへりみる山は霞にこもりくの初瀬のかねの音ばかりして

此ころは鶯の声たゆるまもなし

鶯の声は日ごとの友にして花ふみなる、春の山みち

嵐山にて

大井川水底かけて咲花を梢にのみとおもひけるかな

法輪寺の桜の盛なるに、此花折るべからずといふ札を立たるをみて、物に書つけてそれにむすびつけける。
咲出る花をいさめよ山桜艶はざりせば人も折らじを

かへるさは、なにはより舟にのりて下るに、しかま川のわたりのみへければ
しかま川かちより行しはかま路をけふは浪間に見てぞ過ゆく

五月十日、いよの鳥廻を漕行程、たちし月の廿四日、舟にのりそめし事を思て
海の上に幾日か経しと人問ばいよのゆげたの中にこたへよ

【真幸】

二月の廿まり一かの日、宮古の方にいでたちけるに、松風の関を越るとてよめる

長瀬の真幸

卯月は我帰さをこれやこのふるさと人に松風の関

木葉の里の伊形八九郎がもとにてかれないなどくひて

吾脊子が形見ぞのこるむかしみし其の面かけのさながらにして

時雨する秋の木葉のちりにしのべ分行は袖の露けさ

こよひは高瀬の秋丸村にやどる

あけぼの、霞とともに立出てあわれ旅寝のはたのゆふぐれ

けふは又高瀬川原に暮くれてやどりもとむる秋風の里

河風のところとふけばよますがら草の枕の夢もむすばず

大宰府の天満宮にまうで、

うつしうゑし御前の梅の色々に花咲艶神のみづ垣

二月廿四日、大宰府の都府楼の跡を見て

漢国のおさへの城ぞと聞えてし遠の御門は跡のみにして

箱崎社にまうで、

韓国のしづめとしもぞ箱崎に宮敷いますみづの皇神

箱崎の浜の松原としを経て又きて見んとおもひがけきや

かしこしな□つぬ貢の箱崎の神の御いつは高麗百濟まで

波よする浜の松原いく世へて神さびぬらんはまの松原

かるかやの関の跡を過ると

かるかやの関やいづら春霞綱引野辺はあやなかりけり

福岡の里に、むかしやどれりけるわらやのありかもととひけるに、あるじはやく身まかりぬと聞て

故郷の軒はむかしにかわらぬを何とて人の常なかるらん

むかしみしやどのこずえはかわらねどありしあるじぞつねなかりける

香椎の浜辺にて

白妙の袖さへぬれて香椎がた朝なつみけん子等をしぞ思ふ

香椎宮に詣て

神佐布留香椎のみやのあや杉のあやにたふとき此宮処

文殯のあととひくればかしこきや神のむかしのおもほらんかも(本ノママ)

香椎潟湖干にかれる名のりその名はのりこしに海人乙女とも

おひの水といふを見て、其わたりにもひさしおうなのゐたるに、其事どもとひ聞て
たらし姫三韓国をことむけにちりたらし、水ぞ此水

此社の祝部は竹内宿祢の裔なりといふを

うつせみの世の長人と聞えけん神のはずえは今もありけり

周防の国の上関に舟やどりして

故郷にかよふうきねの夢さめてかぢの音さへあわれにぞきく

岩国の錦帯橋を見に行て

いにしへの飛驒の工や作けん錦の川にわたす板はし

あらしその神のおはせる錦川わたせるはしのあやにくすしく

ともの浦にて、波静なりけるに

続なす海面わけて行舟の影さへうつるとものうらなみ

巖島にまうでしほど、宮うつし貝といふものをかふべきに、わすれたりければ

わすれずも拾こまじをいつくしま名だゝる神のみやうつし賢

同社にて御神楽をたてまつりて

いつくしまふりぬる神の宮居とてねぎがつ、みも神さびにけり

をとめ子が神吹かへす浦風に波の鼓の音ぞうちそふ

備後国あさみの観世音にまうで、

波の上に千ひろの岩をた、みあげて雲にそひゆる法の古寺

秋ならばうつしても見むしまの海のおふげの沖にすめる月影

鞆浦にてよめる

いにしへのともの宝木跡とへどありかをだにもしる人のなき

大丈夫のともの浦波た、ぬ日はあれども家をこひぬ日ぞなき

ともの浦に波た、ぬ日はある物をなど我恋のやむ時もなき

これやこのともの追風やはやも吹いるが如くも難波にもかな

鞆浦の後守明神社にもうで、直に此御社の古ことなどとひけるに、はかぐしうもかたらざりければ、

たらし姫神のむかしをこと、へどこたへもやらぬおその祝部子

小松寺にまうでけるに、内大弁平男の手植松といふを

植置しぬしの名におふ小松寺むかしをしのぶたねと社なれ

保命酒をたうべて

百とせをたもてる徳のいつなればこ、やよもぎが島と見るらん

備前国出さきにて初月を見て

わたの原おはつかなしも三ヶ月の影さす方や故郷のやま

金刀比羅社にまうで、はやくこしことを思ひいで、

今もなほかたらざりけりさぬきがた松尾寺の鐘の響は

岩がねのこ、しき山に宮居して御いつかしこきこれの神垣

三月七日、虫明の迫門を沖より見て過るとて

虫明のせとの松風音にのみ沖漕舟のよそに聞つ、

赤穂の城を見やりて

大丈夫のむかしの跡をしのばれて赤穂の城ぞすきうかりけれ(北巻)

大丈夫の名をしたてつる播磨がた赤穂の城を見るがうれたさ

室津に船はて海上平らかにわたりしに、路こひの心を

長門路や赤間が関に船出して室のみなどにはや着にけり

播磨国かこ川の駅にやどりし比、雨いとう落ければ

雨衣たもとほして寒き日にいやふきしきるかこの川風

春雨のふるをわびしみけふはまたかこ川のべにやどりもとむる

今日は道のほど雨にぬれていとしもさむくわびしかりしに、やどりに着て、きぬ多く引かづき臥つ、よめる

あかふすまなごやが下にたびねして治れる世ぞうれしかりける

故郷をいでこし日よりかぞふれば十夜にあまり七夜也けり

伴へる人々、高砂のわたり見に行ておくれたれば、心もとなかりて

おくれつる我背の君を高砂の庵上の松のまつぞ久しき

唐国の周茂叔東坡のうた、此やどりのしやうしにかきたるを見て

竹をしのびはちすをめしから人の其面かけをうつし絵にして

此里に鹿兒松とていと年ふりて大なる松あり、枝長くたれてうるはし
行かれて雨やどりする蔭もなし一夜はゆるせかこのしま松

ともなへる人々、高砂より帰り来れるに

見し人にいざごと、はん高砂の松吹風はいかにありきや

したがふ

高砂やたゞよそにもて過ゆきしきみを松とも風も音せじ

ふた、び高砂の松を見にゆきて

したがふ

高砂の松は常盤の木の下にふた、び来ぬる身社老ぬれ

高砂の松は隠し夕霧に尾上の鐘のこへぞもりくる

六日、室明神にまうで、

真幸

ちかひてし我やしろのしるしあれや再びたのむ室の神垣

けふは姫路の里にやどりて

朝まだき室津のやどり立出て姫路の里に此日くらしつ

国しのぶたびねの床のゆめさめて枕に通ふ松風の音

須磨の浦にて沖のかたを見て

真帆かけて難波にわたる百つ舟千舟つらなむ須磨の浦波

兵庫にやどりける夜、此里の三田将監のもとへせうそくすとて其はしに

君をわれむこ山風の音にき、てみぬめの浦を明日や過南

湊川の古戦場を過て

大井川時た、ぬ世に生いで、ゆたかにすめることのたのしさ

十四日、京にて筑前人月形七助と云人に初て逢たるに、あすは国へ帰らすよしつけらるゝに
春霞立なかくしそ帰さの道わかじとやきみとまるべく

十七日、嵐山の花見まかりて

みよしの、吉野の種をうつし植てたぐひあらじの山桜はな

今日こずばあすは名に負山風に艶さくらの花やちるらん

大井川花咲比はいかだしよ梢をそめてこかはこがなん

嵐山となせの滝の音にき、てまだ見ぬ人の家づとにもか

ともなへりける高本順が、「花流す水の間にくとめくればなほひとさそふ鶯の声」と読る返し
人さそふ鶯の音をとめくればいはねにか、るはなの白波

又順哥に、「大井川岩ねの波と見へつるは渚の花の盛り」とある返し

大井川岩ねの波の立かへりあすも来て見んやまさくらばな

又返し、順、「山の名の嵐もしらずさくら花明日とはいわじ月待て見ん」とよめる返し

いざけふは花の木蔭にやどりしてなかる、月の蔭さへも見む

順又返し、「大井川ながる、月をせきとめよあけなばいつらし花の下臥」

雲かゝる嵐の山の梢よりとなせに落る花のしろなみ

嵐山峯にかゝれる白雲も花かと思ゆる春のくれかな

法輪寺の庭にたてたるせいさつと云物に書つけける

をらば社人もとがめ、桜花手毎に折て家づとにせん

西行桜を見て

世をすてし人の跡とてこひくればむかしにほふ山さくら花

十九日より、大和のかたへまかりて

青坂の山にもれる玉なればうべやまと、はおひにけらしも

耳なし山を見て

古のそれかあらぬか耳無の名におふ山はきかすがほなる

順かへし

み、なしの山としきけばとはでたゞ心あてにぞそれとしるべき

うねび山の見へけるに

玉だすきうねびの山をけふ見ればむかしながらにたつ霞哉

玉だすきうねびの山は檜原のひじりの御宇の大宮処

順が歌に、「あらそひしうねびの山も耳無の心もとけて霞春かな」とあるに

三山の心もとけて霞む日やみるめもなきかいなみくにばら

天の香山乎

久かたの天の香山霞むるや神代の春にたちかへるらん

あすはよしの、かたにとわんとするに

みよしの、山下風もこよひだに心してふけ花のあたりは

順返し

風にのみあつらふべしやみよしの、花もこよひはちりなはじめそ

さきのかぐ山の返し 順

春のきる衣さらすと見るまでに霞か、れる天のかぐやま

同じいなみ国原の返し

山々は霞にこめてき、すのみおのがつまとふいなみくにばら

ゆく／＼かつらぎ山を見て

かつらぎや高間の山をよそに見て花咲みねをなほやたつらん

順返し

よそにのみ思ひわたりしかつらぎやくめの岩はしけふ見つるかな

池内池尻などいふ里を過るとて

埴安の池やはいづら此里の名をしるべにぞけふべかりける

順返し

はにやすの池やいづらとこと、へばこたへがほにも鳴蛙かな

道のもと古き処々(り) 毒敷をなほたづぬべきを、よしの、花心もとなかりて、むなしく過るとて

みよしの、花に心のいそがれてむかしのあともとはで過行

よしのやまみねの嵐よこよひだに花ちらさずは何かうらみん

つば坂にて峯の桜の咲たるを見て

わけのぼる雲さへ花にほふ也よしの、山もちかくなるらん

同じ坂路をこゆとて

つば坂の峯より落るたきつ瀬は名におふ酒の(本ノマ)いづみなるらん

廿四日、よしの、里にやどる、麓はさながらちりにたるを道行ふりに人にかたれるに

はやきてもみてまし物をみよしの、山の桜の花ちりぬまに

こと、はん立田の川の渡守高嶺の花は散やちらずや

みよしの、山の山守こと、はん花ちりにきといふはまことか

よしの山夕居雲をわけ行て花散里に今宵かもねん

吉野山麓の桜ちにけりおほつかなしもみねのしらくも

花はみな散て青葉のよしの山よし散ぬともなほやわけてん

廿五日、山深くわけつ、花をたづぬるとて

山風(本ノマ)にありへてしもかひありて高ねに残る花をみるかな

よしの川みねの嵐のはげしきにはこす波も花かとぞ見る

よしの、宿にて

みよしのや三船の山をさ夜深く鳴てこゆるか呼子鳥かも

みよしの、花の下臥夢さめて枕にかよふやり水の音

廿五日、吉水院にまうで、

花にねし君がむかしをしのぶればいともかしこき吾涙かな

けふもなほ山深くわけ行に、花のちりけるを見て

花や雲雲や花とも見へわかず霞める空に散桜かな

遙谷といふを、みねより見さげて

みよしの、はるかか谷に咲花は

とうたびもはてぬに、したがふ下句をつきたり

岩間に残るゆきかとぞ見る

如意輪寺の陵にまうでしに、春雨いとう落ければ、かけまくもかしこかれと

旅衣袖さへひちてふる雨はむかしを忍ぶシノブなみだなりけり

同寺の扉に、楠正行が銚にて彫たるうたを見て

梓弓又かへらじと思ふ身のなき数に入る名こそくちせぬ

実城寺まうで、

天の下さだめんとてぞ 天皇の御いつふるしくかり宮処

宮滝にてよめる

みよしの、なつみの川へなつみ来て滝の都の跡を社とへ

ゆふ川の神の調の跡たへて滝の宮古はうらさびにけり

淑人のうへもよしのとなづけ、んよしのをみれば山川をよみ

島津島鶴かひがともよ今もかも吉野の川の瀬にかつきてな

きさ谷といふ処にて、日暮て雨もいと降けるに、知ぬ山路を闇にたどるほど、いとわびしかりける
行くれぬきさ山の間にする鳥もこ、だなかなん道知るべにも

おとに聞きさの中山くに闇に越ればわびしかりけり

廿七日、多武峯にやどりて

梓弓たむの山霧わけのほり高ねの雲にこよひねんかも

廿八日、三輪山にやどる、暁おきいで、神山の方を見わたして

草枕さめつ、見れば有明の月影残るみわの山本

波太横山巖を

昔みしやつ岩むらは今もなほ川べに立てり苔むさびして

於伊勢松坂菅相寺席上贈答

菅笠日記の道をとめて鈴屋の大人をとぶらひて

順

みよしの、花をわけてぞとひ来つる君がしをりの道のまにく

高本大人のよみて賜ひける吉野山の歌のかへし

宣長

心ある君がわけむみよしの、花をしをりに又もゆき見む

分見けむ花のよし野の山よりもふかきこゝろのおくぞゆかしき

かへし

順

山の井のあさき心を君をのみしたふ思思原の歌心はひはふかきとをしれ

探題

遅日

順

けふのみとむつびし友も昔の根のながき春日ぞ猶たのみなる

高本先生によみて奉る

大平

肥の国の道の後なる、熊本の殿につかへて、つるぎ太刀その名もたかき高本のはかせの君は、から文の道のはかせとその道はそがまにくゝとき、かせ人をしへつゝ、朝夕にみち引ますを、神国の神ならふてふ、神の代の直き手ぶりを、かねて又尊みませる事のたふとさ

【真積】

寛政の九とせといふ年の二月の廿あまり六日（本ノマコ）に高本大人にしたがひて都にまい登らんとて、故郷を出たつによめる

真積

五月末は早帰りこん家人に面かわりせず待ていませね

経輔

吉野山花の白木綿今よりもかけてぞしのぶ旅のやどりを

返し

今よりも吉野の花の白木綿をかけてや君をしのびわたらん

経輔

伊勢の海の真玉白玉ひろいもてやすく帰らん君をしぞ待

返し

神風の伊勢行しかば伊勢の海の真玉白玉ひろいもてこむ

宰府の天満宮に詣で、

神垣に移植にし梅の花一重も八重の花と見へけり

廿五日、博多といふ里にて

故郷を思出にけりしの、めの明行く空にわたるかりがね

廿七日、黒崎より小舟にのりて下関にわたる、七里の海路なり

黒崎の入江漕出て長門なる下関にぞ付にけるかも

廿八日、下関より上関まで海路三十六里とふることくに、一日にわたる

渡海の神のめぐみや深からん何さわりなくなだぞ越ける

長門路や赤間の関ゆ舟出して周防の海を今日ぞ渡れる

三月、鞆の小松寺といふにまうづるに、重盛公の植直玉ふ松なりければ

露霜と消にし人の植をきし松のよわひは幾世経ぬらん

三日、鞆より船出して讃岐にわたる

しなとへの神のちはひか吉備の浦や鞆の追風吹出にけり

伊予の山乎

久かたの雲井に見ゆる伊予の山まだ白妙に雲ぞ積れる

いよの山讃岐の海ゆ見わたせば霞の内に積る白雲

四日、たどつより舟にのる、さぬき富士を見て

音にのみ聞わたりにし駿河なる富士移山をけふ社は見れ

風つよく波立ければ

讃岐がたたどつの浦ゆ舟出してはりまに行む浪立なゆめ

五日、淡路島を見て

二柱神の御わざに生初る淡路の島はたふとき路かも

七日、曾祢の天満宮に詣で、

千世破神代のまゝに神垣の内に年ふる松ぞたふとき

ちはやぶる神の宮居ももるともに幾世かふらん神垣の松

高砂にて

神垣の内に年ふる相生の松や昔のみどりなるらん

千代ふる神の御代より相生に生つ、さかふ高砂の松

十七日、京にて

開艶嵐の山の桜花夜の間の風に散やすきなん

春雨よいたくな降そ嵐山いざ見に行む花散ぬるに

秋のくる都の西の嵐山けふは桜のさかりなりけり

大堰川そこにうつろふ桜花一重も八重の花と社見れ

大井川流水の音にきく嵐の山は花盛なり

咲艶ふ嵐の山の桜花けふはさながら雲とこそ見れ

帰さをわすれはてぬる嵐山にほふ桜の花にひかれて

廿日、奈良の都のあとどもを尋ねめぐりて

石神古し宮古の跡とへばかわらぬ物は花にぞ有ける

廿四日

つば坂の山のためけを越ゆくに聞捨がたきたかま驚

吉野にて、一目千本といふ所を

みよしの、よしの、山を来て見れば千本の桜早散にけり

廿五日、桜の枝を折て

咲艶ふ花の香込て手折つるよしの、山の山つとそこる

晴明が滝といふあり、俗にはにじつことも云

よしの山峰より落るにじつこの滝の白糸千代の数かも

廿六日、よしのを立て帰るとて

春雨にいたくふるともけふよりはちらさばちらせみよしの、はな

廿八日、ゆうべ心にかたるゆめを見て

ぬば玉の夕べの夢に大丈夫と思ふ我も家をしぞおもふ

廿九日

春霞棚引渡る白妙の布引山をけふや越なん

四月朔、伊勢大神宮に詣て

千代ふる神代のま、にさく、しろ五十終の宮はたふとかりけり

三日、松坂菅相寺にて本居大人歌合、予、当座によめる

川霧と云題にて

秋深く成行ま、に物の部の宇治の川瀬に霧立わたる

十一日、船は唐崎に行とて

にはの海浦吹風に帆をあげて遠近渡る百の釣舟

十二日、黄船の神社に詣て、

黄船川そこにうつろふ山吹の一重も八重の花と見へたり

五月朔日、大坂安治川口をこぎ出るとて

朝開きみなどこぎ出る船はみな風の心にまかせてぞゆく

三日、明石の湊こぎ出るとて

しの、めのほからくと朝日影明石の浦を舟出するかも

朝日さす明石の浦ゆ見渡せば沖にたゆとふ海士の釣舟

九日、御手洗のみなどを舟出して、やがて右の磯辺に沖鞆の明神といふ社侍れば

渡海の神にしまさば沖鞆の浦の追風はやも吹なん

十三日、備後別府にて和喜ぬしに初め逢て、物がたりしける序によみてつかはしける

唐衣たちわかるともしらぬ火のつくしの国を来てもとばさね

寛政十一巳未之冬霜月もちの日源の奈□が為に是を写しぬ。

直入山すそはの里人 橘比呂寸（花押）

写し終りて

右は上妻先生の御所望により自ら写して一本を呈上する次第であります、原写本は小生の所蔵です。原本は半紙一冊綴ぢの写本で本紙廿一枚あります。巻頭の「野尻蔵書」と巻尾表紙裏の「能勢本」との聯絡は不能です、又原写本を写してやった人も写して貰った人もまだ研究中であるが写した「橘比呂寸」といふ人は豊後竹田の人（旧岡藩）ではないかといふ事を上の字即ち「直入山すそは」云々の文字から判断して居ます、竹田は直入郡ですから……どなたか博識の方の御教示を仰ぎます。

時に昭和十二年八月廿七日

大分市若松通りさ、やかなる紙魚庵にて

三重野幸夫

尚此写本を入手したのはもう十年の餘にもならうと思ふが場所は矢張り大分市内で書画の市か何かに出て来たものらしくこんな事は今あまり記憶ありません、附記します。

題字と蔵書者能勢といふ人の筆蹟原写本の書体を写す、以上。

右遊京雜歌巻冊式拾七枚、昭和十四年六月廿九日清書了る。

昭和十二年八月下旬、大分県植物誌編輯会に田代先生に陪し大分市に滞在すること数日、一日市内若松通三重野古本屋を訪ひ本書を見たり。即店主三重野紙魚庵主人に囑して謄写せしむ。余此書を熊本に見たる事なし、只、菅相寺贈答の歌は先哲偉蹟に見るのみ也。真積は阿蘇郡的石神官山口栄五郎真積と云ひ、高本紫溟の門人也。此書の竹田に伝はれる、或は此人よりしたるものならんか。此三者の紀行を合せ見る時、日程の詳細を知る事を得るが如し。

昭和十四年七月三日三望亭主人 上妻博之識

※歌の「明がたの声」や言葉続きから、或いは「あかつき」とでも読めるか。

追記

今回紹介した「遊字雜歌」を含む「上妻文庫」は、上妻博之氏が郷土関係の資料を収集・手写され、「秉燭雜録」と名付け編纂されたもので、昭和四十三年に御遺志により熊本県立図書館に寄贈されています。本稿を成すにあたり、資料掲載の許可を下さった熊本県立図書館、ならびに、上妻久美様をはじめとする上妻博之氏のご遺族に、厚く御礼申し上げます。